「流れ雲」

中島　俊輔

全力疾走

何に驚いたのか　白い鳥のひと群れが
ぱっと飛び立ち　飛び去っていく
低く低く高く　また低く
それは流れるような弾道を描いて
ぼくたちの網膜に刻み込まれる

南風号

うたた寝をしていると話し声が聞こえた
わたしでいいの？　あなたの奥さんになる人

いいもわるいもないさ
もう一人はいってるんだから
列車が激しく左右に揺れ
窓の外には大歩危小歩危

はりまや橋交差点

むかし高橋写真館があった辺りに
こぎれいなギターショップができていて
スペインの若手作家の手になるという楽器を
店の女主人が奨めた
ねえ　死にとうなる音と違う？

帯屋町

よさこい踊りの轟音が通り抜けて行く
揃いのハッピがひるがえり

半裸身が反り返る
そして静寂
おもむろに立ち上がって老骨を延ばす

天守閣

支配と戦闘の構えの中に立つ急峻な階段
古色を帯びた木質は黒光りして
そこに女人の姿は似つかわしくないが
いま若いカップルが登っていく
ぴたジーンズと白いふくらはぎ

桂浜

とどろく海の波洗う岩礁の上に
白と赤の装束の巫女さんがいて
登ってくる人におみくじを売っていた

一つ買って開いてみると
小吉　また良し

室戸岬

ただ広い空　ただ深い海
音が消え　音が甦る
色も褪せ　色また甦る
空中を漂う塵　ちり　チリ
ああ無限に微小で　無限に透明な

やまもも

きみのくちびる
きみのちくび
きみのちしお
きみのたましい

ぼくのいのり

巨峰

きみのかぼそい指先に紫が染みいる
つぼめた唇　したたる果汁
一瞬　頭の中で時間がリワインドを始め
止まったさきには
むらさきのものがたり

別府再訪

汽船の代わりにジェット機で行く
海岸の遊歩道はオアフ風
海地獄　血の池地獄はいまも見ものだが
青春の昂ぶりは甦るすべもなく
湯布院への旅に思いをつなぐ

湯布院

センという木のお盆に出会ったのは「アトリエとき」
彫刻面の木目が描き出す偶然のアート
傾ける角度で　キラキラとさまざまな絵を描き出す
どんな種類の　どんな木部も素材になると言う
凡にして非凡　まるで湯布院のようだ

岡城址

「荒城の月」には失われた半音がある
犯人は　滝廉太郎の原譜に手を入れた山田耕作だ
以後　東洋の不可思議な神秘性も消えていた
ドイツのスコーピオンズが来日して半音を蘇らせた瞬間
背筋に戦慄が走り　目頭が熱くなった

阿蘇山

またもや一面の霧　1メートル先も見えない
土佐高の修学旅行のときと同じだ
ケーブルカー駅の売店のショーケースの中では
土産物のガラス柱に閉じ込められた小さなバレリーナが
いつか来る出番をひっそり待っている

くまもん

熊本城も水前寺公園も　このゆるキャラにカタナシだ
歩き疲れてカフェにはいり　窓際の席に陣取る
窓ガラス越しに長い城壁と市電が見え
圧巻は
座っている長大なムクの飫肥杉作りのテーブルとベンチだ

さて思想というもの

どの人の思想も生きざまも
深く生い立ちに呪縛されていて
誰もそこから逃れることができない
ぼくの場合は
昭和の軍国主義

音楽

ある人には騒音
ある人には東風
ある人には装飾
ある人には記憶
ぼくには太陽光

楽園

マウイのハナに行ったら
突然ハセガワゼネラルストアが現れた
半世紀前の歌のタイトルだ
ここにはジョージハリソンの別荘もあって
時は海風に乗ってゆったりと流れている

MEMOIR

よくは分からないが
あのバラック校舎の時代に
すべてがあった
あとはただの
つけ足し

そして　いまここ

わが胸にあるすべて
それはトータルで
幸
秋空に浮かぶ流れ雲

完